

子どものいる暮らし——男・夫・父

「とーたん」と呼ばれて

——二人の子どもと暮らして——

島田 聡

我が家で、子どものいる暮らしが始まったのは、八年ほど前のことだ。現在、小学二年生になる長女が生まれたのが、その始まり。予定日を二週間も過ぎた正月の四日の事だった。そのお蔭で、僕は高校の同窓生との前々からの約束、正月

のスキーには参加出来ずじまい、僕の車をあてにしていた友人たちに車だけを貸すことになった。子どもはなにかにつけ、親を求める。思い返すと、生まれるほんの少し前から、長女はそうだったのかも知れない。子どものいる暮らしは結婚当

初、あるいは独身の時のように自由にはいかない。

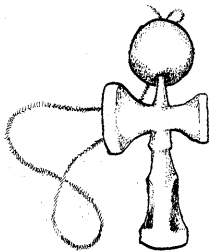
しかし、自由でなくなったからといって、それが即、デメリットでも無いことが、段々と感じられるようになった。忙しい時など、うるさくないといえはウソになるが、求められるということとは、とてもいいものだと感じるようになったからだ。

たどたどしく「とーたん、とーたん……」と何度呼ばれたことだろう。人はこんなにたくさん呼ばれ、あるいは求められる時代を、他に持ち得るだろうか。恋愛のさなかでさえ、あるいは「ロミオ」の名を呪文のように唱え続けたジュリエットでさえ、こんなには相手の名を呼ばなかっただろう。恐らく、子どものいる暮らしだけが、それを与えてくれるのだろうと思うと、何か、掛け替えない時間を与えられた様な思いがしたものだ。

さて、そんな我が家には現在、僕、そして妻、長女（小学二年）、長男（保育園三歳児）、今年二月誕生日定の次〇、の五人？が暮らしている。その具体的な暮らしぶりは……

朝六時半、朝食係の父起床、パソコンの電源を入れ、洗顔・一服、その後メールチェック。七時前、朝食の準備にかかる頃、長女か妻が活動開始、長男はたいいていグーグー小僧、最近は目覚めが良いが、悪いときは朝食に間に合えばいい方、起きて見たら、お母さんもお姉ちゃんもでかけた後……なんて事もままある。

まあ、たいいていは全員が揃って、朝食、ミルクティーにトースト（子どもたちは特



別にジャム付き)、野菜、ハムorソーセージ(子どもたちの好物はこれを切らした時の、ジャガイモのチーズ炒め)。しっかりと自分で着替えを終わった長女と、時にはパジャマのままの長男が席に着くと、朝刊を横目で眺める父と母を相手に、食事と賑やかなおしゃべりが始まる。

特に、最近いっぱしの事がしゃべれるようになった長男がうるさい(笑)。父と母が話しているれば、割って入ろうとし、姉と両親が話しているれば、大きな声で自己主張、堪えきれずに姉が注意すれば、「なんだよー」とボーイソプラノにドスを利かせてみたり……こんなうるさく、賑やかな食事だが、何かの理由で一人欠けるだけで、食卓は途端に火が消えたように淋しくなる。夕食も家族が揃うことの多い、我が家では、この感覚はひとしおだ。

技術としての甘えと笑顔を駆使する長男は、食



事が進まない時など、わがままが激しい。先日も地方ロケで父が不在の食卓で、怖い父がいないのを良いことに、これのひどいのをやらかしたそう。あまりのひどさに耐えかねた母親が、厳しく叱り、突き放すと大声で泣くは、片づけを命じられた食べかけの皿を運悪く落とすは、更に、その後始末を言いつけられると、うちのおもらしはするはで。最悪の事態に、長男の失態?の後始末をブリブリとする母の様子を察してか、優しい姉は、台所の床に散乱した、弟の皿の不始末を黙々と拭いてやっていたそう。

「けいくん（長男の名）、ちゃんと自分でやるんだよ」

「お姉ちゃん、今度はやってあげないからね」

ひとまず、事態が落ち着くと、長女は母親にこう問いかけたようだ。

「お母さん、けいくんのこと、きらい？」

「もう、ごはん作ってあげない？」

「そんなことないわよ」という母親の一言を胸に納めると、彼女はつぶやいたようだ。

「あー、お父さんがいればなあ……」

母親に五人目の家族ができて悪阻がひどかった時も、実質三人の生活はなかなかしんどかった。子どもたちもよく頑張ったと思う。友人の家族と約束していた旅行に、悪阻で具合の悪い母親が参加できず、父と三人で出かけた時もそうだった。姉弟、喧嘩をせずに仲良くしていようと、緊張気味の二人、弟の横暴に耐える姉の姿、ぎこちなく

友人の母親に甘える長男……「あーお母さんがいればなあ……」と父は思ったのだった。普段、家族が揃っていることが多い我が家では、誰にしても一人欠けると、淋しいだけでなく、何か起こると、うまくいかない事が多いようだ、余剰労働力がゼロというか、役割分担が出来てしまっているというか、四人で一組というか……。

そんな家族が、朝食を終えると、八時過ぎには長女、そして妻、と学校・職場へと出かけて行く。僕に早立ちの仕事が無いときには、保育園に出かけるまでの小一時間、残された男組は、それぞれの趣味に没頭したり、一緒に遊んだりして時を過ごす。保育園で長男と別れると、家族が揃うのは夕方だ。一足先に帰るようになっている僕が、五時過ぎに、学童クラブから帰宅する長女を迎えると、米を研いでから、保育園へと長男のお迎えに出発、留守番をする長女のもとに母親が帰

宅し、あわただしく夕食の準備にかかる頃、父と長男が保育園から戻る。そして、例の長男が原因のトラブルの種を抱えつつ、賑やかな夕食のひとつが始まる。我れ先にと、学校、保育園での出来事を話そうとする子どもたちの姿に、小さなうちが花なんだろうなあ、という思いも過ぎりながら、それぞれのトビックスがあれば、夫と妻も互いに報告をしたり、と、それを良く思わぬ（笑）長男の声が大きくなる。

夕食後は、やっと多少ゆったりとした時が流れる。それぞれが思い思いの楽しみに耽れることも、家族揃ってゲームや工作をすることも、姉弟で遊ぶことも（最近はブロックやミニカーなどを並べ、箱庭的世界を作るのが流行っている）……。

そして、母親と子どもたちが一緒に入浴。父が寢床の準備を終える頃、子どもたちが先に風呂から上がり、姉は独りで、弟は父に手伝ってもらいパ

ジャマに着替え、歯磨き。そして、九時を回っていなければ、絵本や物語を読んでもらう、寝る前の最後の楽しみ？義務？を分かち合う。母親が寢室に入り、小声のおしゃべりが、いつしか寢息に変わる頃、ささやかな子どもたちとの一日が終わる。

考えてみると、これだけ家族一緒に過ごせる日があったとしても、眠っている約十時間ほどを除くと、家族が一緒にいるのは、朝の一時間ほど、夕方からの四時間ほどの併せて五時間ほどだ。両親との結びつき・依存が強く、家族が揃う幸福感のある、幼いうちだからこそと思うが、家族で一緒に過ごす、こういう時間を大切にしたいと思う、今日この頃であります。

（写真家）